

「学校と地域」研究委員会報告書

ダイジェスト版(2010年2月作成)

発行：国民教育文化総合研究所

子どもの力を邪魔しないために
- 学校と地域のゆるやかなつながりを -

「私たちも学校と地域のつながりが大切であることをこれまでも提起してきた。したがって、かかわりやつながりを、もちろん、否定する立場ではない。」（報告書、p. 3）

重要なのは、何のための、
どんな内実の関係づくりや
つながりづくりなのか、
という点にある。（報告書、p. 3）

『学校を支援する地域本部事業』って？

「学校支援地域本部は、学校の教育活動を支援するため、地域住民の学校支援ボランティアなどへの参加をコーディネートするもので、いわば、“地域につくられた学校の応援団”と言えます。（中略）学校と地域の連携による学校への教育活動の支援の取り組みが、幅広い関係者の理解と協力のもとに、社会総がかりの国民運動として展開されることを期待します。」

2008年7月文部科学省発表

「学校支援地域本部事業のスタートに当たって」（はじめに）より抜粋

報告書全文ダウンロードは・・・
<http://www.kyoiku-soken.org>

変えられてしまった〈連携〉

(1998年改訂小・中学校学習指導要領・総則)

「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。」



(2008年改訂小・中学校学習指導要領・総則)

「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。」

では、その学校の教育目的とはなにか。

(報告書、p. 14)

「学校的価値」を中心とした連携

(1)「規範意識」と道徳教育

「2006年教育基本法に伴って「改正」された学校教育法では、あらたに「義務教育」の章が新設され、「普通教育」の目標として「規範意識」を養うことが規定された(第21条1号)。それに沿って、新学習指導要領では規範教育が強調されている。」(報告書、p. 41)

(2008年1月、文部科学省中教審答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援教育学校の学習指導要領等の改善について』)

「子どもたちは学校だけではなく、家庭や地域社会における教育によってはぐくまれるほか、社会の変化や風潮からも影響を受ける。このため、道徳教育の充実に当たっては、重要な役割を果たす家庭や地域社会と学校の連携・協力が不可欠であり、三者が一体となった取り組みを進めていくことが重要である。」

(引用は報告書、p. 15)

「連携・協力」の質を問う

地域や家庭は学校の出先機関でも補完機関でもない！

(2)「学力」向上

「ゆとり教育から政策転換した国は「学力向上」キャンペーンを行い、地域でも家庭でも教育力が低下していると強調し、その解決方法の一つとして、「早寝早起き朝ごはん」に見られるような家庭教育の生活習慣の確立と学力向上とを結び付けた国民運動が展開されている。」

(報告書、p. 45)

「『(学校から)子どもがもってきたのが毎日のご飯のおかずの数に対して花丸とか赤丸・青丸とか評価をさせるようなプリントだった。朝ごはんのときに3種類おかずがあったら赤で塗る。2種類だったら青、1種類だったら塗らない』とされた子どもの母親の話がある。(中略)「早寝・早起き・朝ごはん」自体は別に悪くない。だが、それを国民運動としたり、強制することが問題なのだ。」(報告書、p. 52-53)

「私たちは、学力向上のために朝ごはんを食べるわけではなく、子どもと暮らす毎日は、学力向上のために存在しているのではない。」(報告書、p. 45)

「『学校の評判』を下げるような学力の低い子どもや、学校になじめず『問題』行動を起こす子どもたちは、学校や学校化した地域からさらに排除されていくことも考えられる。」

つまり、学校支援地域本部事業における連携の中身をみる限り、子どもたち一人ひとりの多様性を尊重しようとするベクトルが働いているとはいえない。」(報告書、p. 45)

「これまで、共同性の中で成り立ってきた子育て・子育ちの営みが、競争社会のなかで、個々の子どもや親にとってはつながり合う関係性ではなく、ライバルの関係性の中に置かれ、互いに足の引っ張り合いをしている。」

(中略)

競争と管理のさらなる強化は、ことさら子どもたちを分断し、疲弊させることにつながる。学校だけではなく地域も巻き込んで競争と管理が進むのなら、子どもたちが自分らしく安心していられる場がどこにもなくなってしまふことを意味する。」(報告書、p. 46)

多様で寛容なつながりの回復を

「学力も規範も安全の問題もあれもこれも連携して、多くのおとなの手によって隅から隅まで教育的配慮を徹底していくことは、何よりも子どもの力を奪うことになる。学校を中心とした力の入りすぎた連携によって、かえって子どもが息苦しさを感じたり、はじき出されたりしないだろうか。

今必要なことは、学校と地域が寛容を基盤としたゆるやかなつながりを構築すること。

もし、このような関係性が成立するならば、学校現場の緊張がほぐれ、ゆるんでいく可能性がある。おとな同士の関係性がゆるむことで、多様な子どもたちの存在が受けとめられやすい地域へと変わっていく。そのような地域では、子どもにとっても親にとっても安心して過ごしやすい場所となるだろう。」(報告書、p.49)

めざすべき学校のかたちのイメージ

「教育・指導」から、
子どもの成長と自立への
願いを軸にした、地域の『子育て・子育てセンター』へ!

子どもへの願いを共有しつつ地域社会を
自治的に再生するための『交流と生涯学習のセンター』へ!

子ども同士の「世間」の場であり、
自主的なつながり合いを支える『子ども生活・文化センター』へ!

2000年教育総研研究報告書
『つながり、つなぐ学校へ
一育ちあう地域とともに』より。
<http://www.kyokusoken.org>

子どもの力を邪魔しない、地域の取り組み

兵庫県川西市 「子どもの人権オンブズパーソン」

1999年4月、全国で初めて「条例」により設置。『子どもの人権が大切にされるまちづくり』を推進するため、オンブズパーソンは、市の関係機関と相互に連携しながら、子どもと子どもにかかわるおとなを支援する。

オンブズパーソンは

子どもの

味方(アドボケート)が

応援団(エンパワーメント)!

話を聴く!

一緒に考える!

つながりの回復をめざす!

ストーリー

「今日、ひさしぶりに学校に行ったよ!」・・・(中略)・・・
前回の相談からは状況が一変していた。「学校を休んでいるあいだに、少しリュウジ君のことを考えた。前に、僕がリュウジ君に意地悪をしたことがあったから、今度会ったら『ゴメン』って言おうと思った。それで今日学校に行って『ゴメン』って言ったら、リュウジ君も『ゴメン』って謝ってくれたんだ」・・・(中略)・・・子どもは、これまでのことを振り返ったり、気持ちの整理をしながら、これからのことを考えている。それでも、「自分はこんなことで困っている」と言葉にすることが難しかったり、「これからはこうしたい」という答えがでない場合もある。そのような場合、一緒に遊んだり世間話をしながら時間を共有し、関係をつくっていく。一方、様々な発せられるメッセージに耳を傾け、共感し、悩む。そうしたかかわりの中で、子どもは自ら問題の解決に動き出していく。(川西子どもオンブズ・レポート2006より)

子どものくらしと家庭をささえる

家庭への支援

支援を必要とする家庭は「困難を抱える家族」である、それは社会的な構造問題が背後にある、という認識からの出発である。そのなかで「人間関係の構築」こそ、地域で支援ができるものであるし、何よりその支援のために地域と学校が協力すべきことだろう。(報告書、p. 58)

子どもの育つ家庭への福祉的サポート

外国人の子どもたちをめぐる問題の解決は、日本で暮らすすべての子どもたちを大切にし、すべての住民の人権を尊重することにつながっていく。(報告書、p. 59)

外国人の支援

「学校への適応」を子どもに強制したり連絡調整だけの役回りではなく、子どもたちのパートナー／権利擁護者として、教職員のパートナーとして、地域のつなぎとして、必要などき、必要なひとのために、つなぐ役割を果たすスクール・ソーシャルワーカー(報告書、p. 66-69)。

スクールソーシャルワークの導入